

在住外国人支援で活躍する南米研修員たち in 群馬県 ～自治体職員協力交流事業 (LGOTP) 専門研修～

交流支援部経済交流課

1 はじめに

当協会では、総務省と協働で海外の地方自治体等の職員を「協力交流研修員」として受け入れ、日本の自治体で6か月から1年程度の研修を行う「自治体職員協力交流事業」を実施しています。平成8(1996)年度にスタートし、平成23(2011)年度までに、延べ35の国・地域から962名の研修員を受け入れています。

この事業は、東京研修(オリエンテーション等)や滋賀県大津市の全国市町村国際文化研修所(JIAM)で、日本語の学習を中心とした約1か月の研修を行った後、各自治体で専門研修を実施します。

研修員の皆さんは、地方自治体の有するノウハウ・技術を習得され、帰国後、日本における研修の成果や経験をそれぞれの職場において大いに活用されるとともに、自治体間の国際協力・交流の貴重な架け橋として活躍されています。本事業は国際協力事業としてスタートしましたが、研修員の皆さんが自治体の有するノウハウ・技術を習得されるという従来の目的に加え、最近では、自治体の行政施策の実施や問題・課題の解決に、研修員のスキル・経験が大きく貢献している事例が増えてきており、受入自治体にとっても大きな成果を上げています。

先駆的な事例としては、多文化共生分野における活用があげられ、群馬県では、「自治体職員協力交流事業」を活用してブラジル、ペルーからカウンセリングの専門職を研修員(平成23(2011)年度は3名)として受け入れています。

今回、2011年10月31日(月)に群馬県の専門研修先である太田市内の学校(コレジオ・ピタゴラス・ブラジル太田校、太田市立蕪川小学校)を訪問し、学校の関係者や研修員の皆さんから、直接、研修の様子等を聞くことができました。また、皆さんの生の声から、ブラジル・ペルー人をはじめ在日外国人が抱える様々な問題を再認識することができましたので、ご報告いたします。

2 コレジオ・ピタゴラス・ブラジル太田校

午前中、コレジオ・ピタゴラス・ブラジル太田校を訪問しました。ここは、ブラジルからの研修員カーラさんが専門研修を受けている学校で、はじめに、フランススコ校長先生から、学校の概要を説明いただきました。

「ブラジル外務省からの依頼により、在日ブラジル人支援のため、ブラジル国内に展開する私立学校であるコレ



コレジオ・ピタゴラス 太田校

ジオ・ピタゴラスの日本校が 1999 年に開校されました。

当初は高等教育のみでしたが、現在は小・中学校、幼児教育も行われており、太田市をはじめ、日本国内に 6 校あります。日本のピタゴラスはブラジル本国の教授法に基づき教育を行っており、教員もブラジル本国から招聘しています。

ブラジル本国のピタゴラスでは、3～6 歳の教育において、すべての学校にカウンセラーが在籍し、7～18 歳では、教育アドバイザーが児童・生徒をサポートしています。これらは教育現場での問題予防策として配置されています。



説明の様子(校長室にて)

学校概要の説明後、専門研修の様子についてお話いただきました。「カーラさん達は『研修員』として来日しているが、キャリアを積んだプロフェッショナルであり、学校にとってはプラスのことしかありません。子供が抱える問題は言語だけでなく、カルチャーショック等による不登校も問題にあり、これらに対応するカウンセリングの必要性を改めて強く感じています。

現在、カウンセラーが問題を抱えている生徒と向き合うことができる期間が 6～10 か月であるが、最低でも 1 年は必要で、さらに言えば、生徒の問題を本当に解決しようとなると 2～3 年は必要なのではないでしょうか。重症な問題だと短期では治療できないので、担当カウンセラーが短期で変更することは避けたいというのが本当の希望です」と専門研修について高い評価をいただきました。

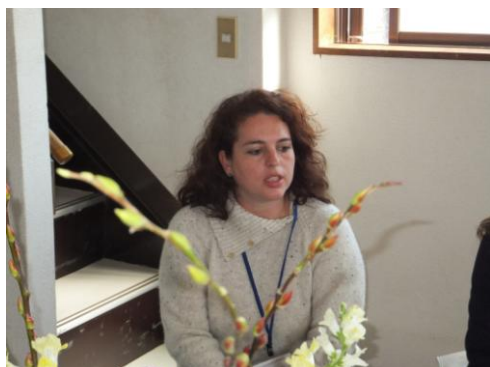


高校生クラス



コンピュータールーム兼多目的室

次に研修員のカーラさんから、専門研修の内容や自分の思いを話していただきました。今年の 3 人の研修員は、昨年の研修員が実施した「個人カウンセリング(相談)」、「心理治療」に加え、「グループカウンセリング」の 3 つの手法を実施することにしました。「グループカウンセリング」は、問題を将来的に予防するのに効果的であるとのことでした。現在、カウンセリングを担当している学校はブラジル人学校が 2 校、公立学校が 4 校(まもなく 5 校)であり、ピタゴラス以外の学校では、3 つの手法全てが実施できないことが悩みとのことでした。



研修員のカーラさん

生活面だけでなく授業内容に関連するカウンセリングを行うのも必要であるため、積極的に授業やイベントにも参加して、生徒からの信頼を得て、心を開いてもらう努力もされていました。また、ピタゴラスで、先生とのワークショップや親に対する講演会及びワークショップを開催し、それらのアンケート結果をカウンセリングにフィードバックされていました。

「単に『相談』という簡単なことだけでも、生徒が心を開いてくれるのに十分な効果があること」を挙げられました。また「外国人学校は福祉や医療機関ともしっかり連携する必要がある。保護者は、DVや虐待が学校に知られてしまった場合、学校から児童相談所に連絡されることを避けるため、生徒を転校させるという例も聞く。ブラジルでは、事例が起こると各機関が共同で徹底的に調査するのが普通である。学校は教育機関なので制約はあるが、仲介役としての外部の専門家の設置や児童相談所と積極的に連携することも必要だと思う」と熱く語ってくれました。

この日は、別の学校で専門研修を受けている、ブラジルからの研修員のジャーニーネさんも同席してくれました。ジャーニーネさんは「ブラジルでは生徒を保護する施設が多い。日本にも、もっと必要なのではないかな。また、児童へのカウンセリングや教員へのオリエンテーションも必要だが、一番大事なものは親や家族に対する支援であり、オリエンテーションや生活へのサポートが大事だと思う。これには政府からの支援も必要である。具体的な対策としては、来日前の赴任家族にオリエンテーションを行い、違った文化、環境の中に滞在する現実をしっかりと認識してほしい。例えば母国語で対応できる専門家が足りないこと、医療カウンセラーが少ないことはしっかりと認識しておいてほしい」と話してくれました。



研修員のジャーニーネさん



多目的室兼カウンセリングルーム



カウンセリングに使う動物や家具などのミニチュア玩具

3 太田市立葦川小学校

次に、カーラさんがカウンセリングを行っている公立学校の1つ、葦川小学校を訪問しました。小学校では、神山 和夫 校長先生（平成 13（2001）年～平成 15（2003）年のクリア業務部指導課長）にお話をお伺いしました。

葦川小学校は、全校児童 468 名のうち7名（6名ブラジル、1名フィリピン）が外国籍児童で、今年度から、研修員にカウンセリングを依頼されています。外国籍児童の抱える問題の1つに言葉があるが、これは保護者の悩みであることも認識すべきであると考えているとのことでした。

また、小学校では、日本語能力が十分でない保護者のために、ポルトガル語による通知文書、通知簿の作成や国際教室の実施、日本人教諭1名、ポルトガル語の話せる教員や日本語指導助手によるサポートの実施などの対応を行っているとのこと、公立学校でも可能な限り、外国籍児童へのサポートを行っていることが良く分かりました。

4 ペルー研修員マヴィさん

最後に、太田市内の小学校でペルー人児童の母親へのカウンセリングを終えたばかりのマヴィさんに話を聞くことができました。

マヴィさんは「教育の問題を専門とするカウンセラーが必要と感じている。日本で1番びっくりしたのは親子のコミュニケーションのトラブルである。両親が共働きで仕事が忙しいため、子供を公立学校や託児所・保育園に預けることによって、子供が日本語しか話すことができず、親とのコミュニケーションで使用する共通言語がなくなってしまう。その結果、親が子供に対して、十分な育児・しつけ・アドバイスが出来



マヴィさん（左から2番目）と一緒に

ず、家庭内の人間関係構築が阻害されてしまう。また、子供たちは日本に生まれ、日本語しかできなくて、内面も日本人になりきっているのに、国籍やパスポートのうえでは外国人である。身分と自己アイデンティティとのギャップは、子供たちに不安をもたらし、「自分の居場所がない」と訴える子供が多い」と話してくれました。

5 おわりに

今回、群馬県の専門研修先である学校の関係者や研修員の皆さんに、直接、話を聞き、研修員の活動が、ブラジル・ペルー人をはじめ在日外国人が抱える様々な問題の解決の一助になっていることが良く分かりました。また、学校をはじめとする地域の人々の期待の高さを感じ、今後、群馬県の先駆的な取組が他の地域の参考になることを確信しました。

当協会では、今後も、受入自治体にとってメリットのある取組となるよう受入自治体の

皆さんと連携を取りながら、「自治体職員協力交流事業」を推進してまいります。

最後に、専門研修に尽力いただいております関係者の皆さまに改めてお礼を申し上げて、報告を終わります。

(水越主査 京都府派遣)

